

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 22 日現在

機関番号：16101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770134

研究課題名(和文) 白話小説における批評と創作の関連

研究課題名(英文) Relationship between criticism and writing of Chinese classical vernacular novels

研究代表者

田中 智行 (Tanaka, Tomoyuki)

徳島大学・大学院総合科学研究部・准教授

研究者番号：50531828

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：中国の古典白話小説について、小説本文に対する批評が次世代の小説創作に対して与えた影響を考察した。まず、自らも小説執筆を志したが挫折し、創作の代わりに『金瓶梅』に対して詳細な批評を施した清・張竹坡について、先行する金聖歎の『水滸伝』批評と比較して批評史上における位置づけを論じ、またその「批評第一奇書金瓶梅読法」を翻訳紹介した。研究期間後半には『金瓶梅』本文の訳注つき新訳に着手した。旧訳以降の研究の蓄積を活用して、正確な本文の翻訳に努めると同時に、訳注において明・清の興味深い批評を訳出することにより、大きな影響力を持ったこの小説がどのように読まれてきたのかも紹介した。

研究成果の概要(英文)：I researched the influence of Chinese vernacular novel criticism on the writing of new novels by authors belonging to the next generation. First, I studied a detailed critique of Jin Ping Mei by the Qing critic Zhang Zhu-po, who comments on the novel rather than his own unfulfilled novel writing. I discussed his position on the history of literary criticism by comparing his critique with Jin Sheng-tan's comments on Shui-hu zhuan, and translated his essay titled 'How to Read the Jin Ping Mei' into Japanese. Second, I began working on a new annotated Japanese translation of Jin Ping Mei. Based on the accumulated studies published after the previous translation, I attempted to translate the text accurately. Simultaneously, I introduced how this highly influential classic was interpreted, by translating some of the noteworthy comments of Ming and Qing critics in my translation notes.

研究分野：中国古典文学

キーワード：中国文学 古典文学 小説 批評 翻訳

1. 研究開始当初の背景

従来、とくに我が国における白話小説研究においては、金聖歎についての研究にやや蓄積があるのをほぼ唯一の例外として、小説批評(評点)に十分な関心がもたれてこなかったきらいがある。他方、中国においては白話小説への批評や小説理論についての関心が比較的高く、小説批評研究の専著もあるほか、小説理論史、また文芸批評通史などにおいても、白話小説批評が取り上げられ論じられることが少なくない。米国においても、金聖歎研究のほか、白話小説批評をテーマとした研究書が早い時期からあらわされており、作品解釈においても古典小説批評の観点を積極的に取り入れた研究がみられる。

こうした研究成果に刺激を受けて、本文を批評つきの形で受容した読者が、みずから白話小説を作る側に回ったときに、かつて自らが読んだ批評から(意識的にであれ無意識的にであれ)小説作法のうえで影響を受けることはなかったのだろうか、との着想を得た。これにもっとも近い角度からの先行研究としては、David L. Rolston, *Traditional Chinese Fiction and Fiction Commentary: Reading and Writing Between the Lines* (Stanford: Stanford University Press, 1997)が挙げられる。

2. 研究の目的

中国の明清代の白話小説における小説批評と小説創作との連関ないし連動を明らかにすることを目的とした。この時期の批評(評点)は小説本文と共に行間や欄外などに印刷されて、受容する側は本文と批評とを同時に受容していた。当初の批評は、付されたとしても簡単な印象程度の内容であることが多かったが、金聖歎が『水滸伝』に詳細な批評を施してからは、その影響を受けて、詳細かつ体系だった解釈を記す批評も現れるようになってくる。そうした批評を読んで小説を見る目を養った読者が、みずから小説作者となって創作する側に回った際に、その作品には批評からのどのような影響があらわれたのか、自作に対してどのような批評眼が発揮されたのかを検討せんとした。

3. 研究の方法

研究期間の前半においては、主に清・張竹坡の『金瓶梅』に対する詳細な批評を精読し、とくにその議論の大成ともいえる「批評第一奇書金瓶梅読法」を、文中で触れられている小説の場面を確認しつつ、翻訳紹介した。また、張竹坡が金聖歎からの影響を自認していること、また自ら小説執筆に取り組もうとして挫折した体験を記していることを重視し、

小説批評を実作に活かそうとした小説家志望者(作品は残らなかった)としての張竹坡に注目し、創作の挫折経験が批評にどのような影を落としているのかに注目した。

研究期間の後半においては、当初の予定を変更して『金瓶梅』の訳注つき新訳に着手した。訳注においては、一般的な意味における注釈を施し、また先行作品の引用箇所についても必要な注記を加えることはもちろん、本研究課題の目的に鑑み、崇禎本批評者や張竹坡による興味深い批評をも部分的に訳出紹介し、一般読者にもわかりやすい形で、後世の小説(たとえば『紅樓夢』)にも大きな影響を与えたこの作品が、いかなる批評とともに流通していたのか、その一面であれ示せるようにつとめている(作品後半については作業を続行中)。

4. 研究成果

(1)まず張竹坡研究については、金聖歎の『水滸伝』批評との比較を軸にした論文(既発表の論文にもとづき加筆した中国語論文)と、「批評第一奇書金瓶梅読法」の訳注とを発表した。

張竹坡の『金瓶梅』批評には金聖歎の『水滸伝』批評からの影響がつよい一方、批評の前提としている考え方において、両者には異なる一面も窺える。張竹坡における小説作者は、作品の隅々までを「意」によって管理する者として位置づけられ、その作者像は金聖歎に比して技能者としての性格が強い。こうした差異の生じた背景としては、内面的直観よりも具体的議論が重んじられるようになった明末から清初への文化風潮の変化が指摘できるであろう。また、より直接的な原因として、張竹坡が自ら小説執筆を志して挫折した体験を告白していることは注目に値する。才能ある作者への憧憬と、作者の創作技法を明らかにすることによる自己表現への希求が、作品を意図と技法で統制する作者像に反映しているのではないかと考えられる。

「批評第一奇書金瓶梅読法」の翻訳においては、「読法」があげている具体的な場面が小説本文のどの箇所なのか分かるように回数を注記し、また必要な箇所には脚注を施すなどして、我が国ではほとんど顧みられることのなかった張竹坡の『金瓶梅』論の一端なりとも紹介することができたと考えている(論文、学会発表)。

(2)研究期間後半には、『金瓶梅』新訳作業に着手した。我が国における『金瓶梅』の学術的な全訳は、小野忍・千田九一氏の手にかかるもの(以降「小野訳」と称す)に限られるのが現状であるが、これも厳密な意味での全訳ではなく、性描写の類はほぼ省略されており、省略したことすら注記しないため、話がつながっていない。かつ、注釈も十分とはいえぬため、一般的な読書人がこの翻訳によって作品のあらすじ以上のものを理解するの

は、かなり困難といわざるを得ない。さらに多岐にわたる先行作品引用の出典調査は小野訳があらわれた後に格段に精密に行われるようになったため、当然ながらそうした研究成果を小野訳は取り入れていない。小野訳は当時における偉業ではあるものの、『金瓶梅』という大古典には、現在までの研究の蓄積にもとづく訳文と注釈が必要であろうとの考えから、新訳に取りかかった次第である。本研究課題に即していえば、『金瓶梅』という作品やそのもっとも普及した版本に付されていた張竹坡批評は、後世への影響も大きい(たとえば『紅樓夢』の作者が読んでいたのはおそらく張竹坡の批評が施された『金瓶梅』だったろうとの説がある)、『金瓶梅』本文の正確な訳出にくわえて、注釈において明清の批評を一部分なりと紹介することによって、本作品の受容のありかたの一端を示すことも目標とした。本研究期間内に、約二年半を費やして全編の約半分(第五十回まで)を訳出し、上巻(いまのところ全二巻予定)の出版を確定させることができた。さらに改訂を加えたうえで、2018年の出版を予定している。

(3)また、上記翻訳作業の途中で気付いたいくつかの点について、『金瓶梅』宋惠蓮故事を読む(仮題)と題した論文を執筆した。たとえば、かなりの紙数をへだてて描かれる別々の場面において、形象的によく似た人物をよく似た情景に配し、文章表現においてもあきらかに類似した文言(もんごん)を用いて両者を対(つい)の関係とし、ふたつの場面が二重写しになるよう構成的に結び付けている箇所が見受けられること、同一人物の同一場面中での発話において、一人称や二人称、親族名称を途中で変化させることによって心情の変化をあらわす技法が、効果的に用いられていること、などを論じた。については、『水滸伝』について金聖歎の有名な指摘があるが(武松を誘惑するに際して潘金蓮の呼びかけ方が変わる点を指摘する)、金聖歎の『水滸伝』批評よりも早い時期に執筆された『金瓶梅』においても、おそらく『水滸伝』から学んだと思われる同様の技法が、すでに見いだされるのである。この論文は、2018年に出版見込みの共著の一章として発表予定である。

(4)以上のほか、中国文化全般をあつかった中項目事典のうち、「金瓶梅」の項目を担当執筆した。(図書 所収)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

田中智行「張竹坡評点 金瓶梅 的態

度：対金聖歎的繼承與演变」『文学新編』第19巻、2014、33-60、査読有

田中智行「張竹坡「批評第一奇書金瓶梅読法」訳注稿(下)」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』第22巻、2014、95-110、査読無

田中智行「張竹坡「批評第一奇書金瓶梅読法」訳注稿(上)」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』第21巻、2013、85-104、査読無

〔学会発表〕(計1件)

田中智行「張竹坡評点 金瓶梅 的態度：対金聖歎的繼承與演变」、2013 明代文学與思想国際學術研討会、2013年11月8日、嘉義(台湾)

〔図書〕(計1件)

竹田晃、大木康、板倉聖哲、市川桃子、尾崎文昭、木村英樹、西本晃二、林文孝、青木隆、明木茂夫、荒木達雄、飯田真紀、飯塚容、井川義次、池上貞子、池澤優、石川洋、石川英昭、石濱裕美子、田中智行、他118名『中国文化事典』丸善出版、2017、784頁、担当箇所364-365頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

田中 智行 (TANAKA Tomoyuki)

徳島大学・大学院総合科学研究部・准教授

研究者番号：5 0 5 3 1 8 2 8

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()